

No.

2006 年度 NGO-JICA 相互研修（関西） 報告書

～日本のよりよい国際協力はどうあるべきか～

平成 19 年 3 月

（2007 年）

共催 独立行政法人国際協力機構 兵庫国際センター（JICA 兵庫）

独立行政法人国際協力機構 大阪国際センター（JICA 大阪）

兵庫セ

JR

07-003

本報告書に記載されている内容は、参加者によるコメント・アンケート結果をそのまま掲載しており、JICA や NGO を代表する意見ではありません。

はじめに

NGO-JICA 相互研修は、1998 年以来延べ人数で約 200 名の参加者を得て実施してきました。

本研修の黎明期から NGO-JICA 相互研修として重要な視点は、「連携を模索する以前に、先ずはお互いをよく知ることから始めなくては、有効な連携はできない」ということであり、NGO と JICA のスタッフ双方が様々なテーマへの意見交換を行うなかで、「相互の相違点を知り、学びあうこと」に重点をおいて進めてきました。

2006 年 3 月の NGO-JICA 定期協議において、本研修を地方で開催することについて提案がなされ、JICA 兵庫および JICA 大阪並びに（特活）関西 NGO 協議会で意見交換を行いました。そこでは、関西で東京と同様の内容を地方開催として行うのか、あるいは違う形式の研修として開催するとしたらどのような研修を目指すべきかということ、2006 年 6 月から 4 回にわたり意見交換をしてきました。

その結果、NGO と JICA のスタッフの双方が、「相手方のここが理解できない」という本質的な部分を本音で話し合う機会が、これまであまりなかったもので、その点を話し合う研修と位置づけて取り組んでみようとの結論となり、今般 JICA 大阪にて本研修を開催することとなりました。

1 泊 2 日、正味 24 時間の意見交換により、日本の国際協力をよりよく実現するためのパートナーとして、NGO と JICA との相互理解が促進されたことが確認でき、意義ある研修だったと評価しております。

今後は、ここでの議論を契機として、それぞれが本研修で得た問題意識を日常業務の中で活かしていくことが肝要です。参加者の皆さまの活躍を期待しております。

最後になりましたが、本研修実施にあたってご協力いただきました参加型開発研究所の中田豊一代表、（特活）関西 NGO 協議会の藤野達也代表理事、榛木恵子事務局長に、深く感謝申し上げます。

2007 年 3 月

JICA 兵庫 所長 森川秀夫
JICA 大阪 所長 高橋嘉行

目 次

はじめに

1	NGO-JICA 相互研修（関西）事務局総括	2
2	研修総括（ファシリテーター 参加型開発研究所 代表 中田豊一）	3
3	研修概要	7
	（1）研修の目的	
	（2）研修テーマ	
	（3）主催	
	（4）研修期間	
	（5）研修場所・宿泊場所	
	（6）研修経費	
	（7）研修実施体制	
	（8）日程	
	（9）参加者リスト	
4	研修内容	10
	（1）開会式	
	（2）ブレインストーミング	
	（3）全体ワーク「NGO-JICA 連携の実際をとおした現状の課題（意見交換）」	
	（4）グループワーク「ODA と NGO は本当に連携する必要があるのか（意見交換）」	
	（5）グループワーク「NGO および JICA が連携するために、自分たちはどう変わるべきか」	
	（6）振り返り	
5	NGO-JICA 相互研修（関西版）アンケート集計結果	14
6	その他資料	24
	（1）事前打ち合わせ議事録	
	（2）募集要項・チラシ	

1 NGO-JICA 相互研修（関西）事務局総括

本研修の事務局として、JICA 兵庫、JICA 大阪、関西 NGO 協議会が継続的に意見交換を実施してきた。東京で開催しているものと異なる研修であることから、いかなる違いがあるのか、その概念整理をこの場を借りて行いたい。

具体的には、5つの重要なポイントを共有したい。

（1）研修テーマは「よりよい国際協力」とする。

NGO と JICA が合同で会議や研修を行うときには、「いかに連携するか」という視点で実施することが多い。しかしながら、この研修では NGO と JICA の連携のあり方について意見交換するのではなく、むしろ「日本の国際協力の長短」というような本質的な議論を、NGO と JICA がともに意見交換することを指向する。そのため参加者にも、組織としての公式見解を語る場とするのではなく、個人として「どのようによりよい国際協力を行うか」、「現在の日本の国際協力の課題は何か」ということについて真摯に話し合うことを期待している。

（2）NGO-JICA 相互研修（関西）は参加者層のニーズがある場合のみ開催する。

本研修は、議事録を読んでいただくとわかるように、開催することが前提ではない。むしろ、開催するニーズが、NGO 側、JICA 側双方にあるのかということを見極めることが優先されるべきであり、参加者層のニーズがつかめないときには開催延期も視野に入れている。今回の研修も最初の打ち合わせ時点では開催することを前提としておらず、関係者で議論したところ、「相互研修の場で本質的なテーマを話したことがないので、その内容を話しあい、次年度以降に開催する意義はあるかを検証する」ということが確認できたため開催することとなった。

（3）NGO-JICA 相互研修（関西）の企画は「公募型の実行委員会」で行う。

JICA と関西 NGO 協議会事務局がすべてお膳立てをして NGO 側、JICA 側それぞれが参加するのではなく、実行委員を完全に公募する形を指向する。その際、JICA 兵庫、JICA 大阪、関西 NGO 協議会事務局は、初回の実行委員会開催の周知は行うが、実行委員は広く公募する。また、参加者層からのニーズを取り入れるために、参加者には連絡する際、運営側の権限などを明確にしておく必要がある。なお、役割分担として NGO 側と JICA 側は対等であるが、事業運営の効率性のみを考えると、事務手続きは実施体制としてより整っている JICA が担うことを現時点では想定している。ただし、事務手続きを公募の実行委員からなる別団体が実施することが承認された場合、その団体が実施することも可と思われる。

（4）NGO-JICA 相互研修（関西）の参加対象エリアは西日本とする。

開催地の地名として「NGO-JICA 相互研修（関西）」としているが、関西圏のみが対象となるのではなく、西日本エリア全体を対象とする。そのため、必要であれば名称変更も検討したい。

（5）NGO だけでなく「国際協力」の名の下に自治体なども対象とし、幅広い参加者を募る。

首都圏以外の地域においては、地域での国際協力のステークホルダーは NGO だけでなく、自治体、大学、民間の財団なども含まれる。

2 研修総括（ファシリテーター： 参加型開発研究所 代表 中田豊一）

（1）はじめに

JICA と NGO による相互研修は 1998 年に始まり、国総研と JANIC（特定非営利活動法人国際協力 NGO センター）が実施に当たってきた。東京が会場であり、地方からの参加も可能ではあったが、自然、関東近辺からの参加者が大勢を占めた。

関西でも、という声が上がったのは、JICA 兵庫や JICA 大阪の職員と関西 NGO 協議会の関係者が地域で具体的なやり取りを重ねるなかで、より地域に密着した形での交流や相互理解のためのまとまった機会が必要との認識が強まったことによる。具体的には、2006 年 3 月の NGO-JICA 定期協議会において、関西で開催してはどうかとのアイデアが出され、6 月から実施に向けての検討が始まった。

準備を重ねるなかで、東京での相互研修が初めから連携を前提にしているために制度的・技術的な話題に傾きがちになっているが、より根本的なところから関西では議論する必要があるのではということで双方が一致を見た。連携を前提にするのではなく、本当に連携が必要なのか、ということから始めようということになった。

そのために、まずは、よりよい国際協力について互いの考え方や実践についての意見交換を中心に今回は実施することを基本的な方針とした。それに従ってドラフト段階では「NGO・JICA 連携の課題と可能性」とあった研修のサブタイトルを「NGO と JICA のスタッフの対話」と変更した。

関西では初めての試みなので、まずは互いを知り合い、理解を深めることに重点を置くという意味でも、あまり細かいテーマ設定をせず、参加者の声を取り入れながら柔軟にプログラムを進めていくことにした。

全体を振り返って、極めて真摯で率直な意見交換と議論を行うことができたといえよう。とりわけ、何のための国際協力か、という根本的なテーマについて、それぞれが個人的な動機や参加の経緯にまで立ち戻りながら、深く掘り下げ、参加者同士で共有しあうことができた。これは、それぞれの今後の関わり方を深めるため、そして JICA と NGO の連携を検討していくため、という両方の目的において、たいへん有益であろうと思われる。次のステップのための最初の貴重な足場を築くことができたといえよう。

ただし、次の開催については、その必要性の再確認も含め、今回の結果を踏まえた上で、さらなる議論を重ねていく必要があるだろう。

（2）研修の内容と進め方

上記 1. の基本方針「よりよい国際協力のあり方について互いの考え方や実践について意見交換を行うなかで、連携の必要性やあり方を浮かび上がらせる」ことを、ワークショップという形で進めていくこととした。

そのための準備として、参加申し込みの際の事前アンケートとして、「連続する 3 日間に、どのような 24 時間を過ごしたか」を書いてもらうこととした。その目的は主に以下の 2 つであった。

- ①自分の日常を改めて振り返る。
- ②互いを知り合うための具体的な材料とする。特に JICA 職員、NGO スタッフの双方がそれぞれの日常について知ることで、共通する部分と違っている部分について認識を深めるための材料とする。

研修では、導入として、このアンケートを見せ合い、その感想を述べ合うことを皮切りに、自己紹介と活動紹介に十分時間を取りながら進めていくことにした。実際には、極めて興味深い紹介が続き、時間的には長くかかったが、互いを知り合うという意味でも、自分のスタンスを確認するという意味でも、最初のセッションとして十分な意義があった。

次に、「参加者各自の自己紹介を聞いて、そのうちの誰のどのような話をもっと聞きたいか」というアンケートを行い、それを参考に、数人を選び出して詳しい活動紹介をしてもらうこととした。

実際には、NGO 側から一人、JICA 側から一人に、それぞれの活動を紹介してもらい、質疑応答を行った。

これ以降の進め方については、腹案は用意したものの、固定的なプログラムとはせず、ここまでの進行具合を睨みながら、事務局と相談して適宜決めていくという方針で臨んだ。

上記のセッションの結果として、連携の実態や問題点も浮かび上がってはきたが、事例と時間の制約から、十分には深めることができなかったという感触が強かった。したがって、次のセッションは、「ODA と NGO は本当に連携する必要があるのか」を 3 つのグループに分けて議論してもらうこととした。

発表は翌日の午前に、各グループから行った。各グループの発表からも、「まず連携ありき」というのではなく、もっと根本的なところでの議論が必要との声が強かったので、「よりよい国際協力のあり方を考えるなかから、自然に連携に関する課題が浮かび上がる」という本来の流れに戻ることとした。具体的には、以下のような組み立てを行った。

まず、各自が「国際協力の世界に足を踏み入れた経緯と動機」を思い起こすことで初心に帰り、その上で、「何のための国際協力なのか」を深く考え、互いに共有しあう。そして、「国際協力の真の目的」を踏まえた上で、「よりよい連携のために何が必要か」を議論する。その際も、相手に求めるのではなく、双方が「よりよい連携のためには自分たち（ODA＝JICA あるいは NGO）はどこがどう変わらなくてはならないか」を自らの課題として検討し、JICA、NGO に分かれて発表、自由に意見交換した。

（3）研修の結果と成果

①互いを深く知り合う

立場を超えて互いに深く知り合う、という目的は十分に達せられた。NGO スタッフ同士、JICA ス

スタッフ同士の間でも新たな出会いがあった。参加者が積極的かつ真摯な自己開示を行ったことで、貴重な学びの場を形成することができた。

国際協力の世界に足を踏み入れた契機や動機に、JICA・NGO の間でさほどの違いはなく、タイミングや出会いがどちらに属することになったかの最大の決定要因であったことがわかった。その意味では、今回のほとんどの参加者は、もともとの性格や国際協力に対する考え方に根本的な違いがあったようには思われなかった。

②国際協力の原点を確認

「自分がよりよく生きるために他者に協力する」という姿勢こそが、国際協力の原点であることが多くの参加者において一致していた。JICA・NGO 連携もその枠組みのなかで捉えるべきであることが認識された。

③組織の仕組みと性格の違いを理解

NGO スタッフにとっては、JICA という大きな組織が持つ意思決定の仕組みの複雑さが、やり取りを通して具体的に理解できた。NGO 連携のスキームもその一環として捉えることでより理解し、対処しやすくなることであろう。JICA 側からすれば、NGO の厳しい財政状況、とりわけ資金集めの困難さなどが切実に感じられたことであろう。そうしたなかで NGO が目指すものについても理解が深まったに違いない。

④JICA にとっての NGO 連携の位置づけの確認

今回参加した JICA 関係者の大半は、地域のセンターで市民協力を携わったりして、NGO も含む市民社会への働きかけや連携に対して、ある程度理解と経験を持つ人たちであった。その点では、相互理解も深まりやすく、議論もスムーズであった。他方、JICA の業務の大部分は、それとはまた性格が違ったものであり、NGO 連携は、NGO が期待するほどには主流になっているわけではないことも確認された。

JICA からの参加者同士がこのことを改めて確認し、市民参加協力の推進に向けての意欲を高めあうことができたのも大きな成果であった。また、NGO 側にとっても、JICA という組織の全体像を改めて垣間見ることができたのは、今後の関係を考える上でたいへん参考になったものと思われる。

(4) 課題

①参加者について

取り立てて問題はなかった。強いて言えば、NGO 側の参加者がもう少し多ければ、さらに多様で活発なやり取りが期待できたものと思われる。

JICA 側の参加者については、小数でいいので、本部で海外事業の推進に直接関わる部署（地域部や課題部）の職員の参加があれば、連携の課題について、より包括的に検討することができるであろうとの感触を持った。

②フィールドワークを組み入れる

今回は、会場は JICA 施設でもよいが、NGO の事務所を実際に訪ねるなどしての小さなフィールド

ワークが入れられるとより効果的であろう。

③より参加型の研修を

今回は、初めてということや参加者の確定が遅かったこともあり、ファシリテーターと事務局が進行のイニシアティブを完全にする形となった。次回からは、早めに参加者の目処を立てて、今回の経験を踏まえながら、参加予定者でプログラムを作っていくという、より参加型の研修を組み立てることも可能と思われる。

その上で、少なくとも初日の早い段階で、全プログラムが確定できることが望ましい。ファシリテーターとしての反省点でもある。

以上

3 研修概要

(1) 研修の目的

NGO と JICA のスタッフの双方が、相手方に対して「自分たちからみたらここが理解できない」というもののうち本質的な部分を本音で話し合おうという機会として本研修を実施する。その意味では、どちらかが一方的に教える研修、例えば開発学の概念を学ぶような類の研修ではない。お互いの立場を理解しつつ、一歩踏み込んで建設的に対話をすることで、次の3つの成果が期待される。

① つながる「線」

NGO と JICA のスタッフ同士が本質的なつながりを構築することを目指す。その前提となる自由な意見交換から、お互いの制約と連携の可能性を見つける。

② ひろがる「面」

個人間のつながりから発展し、組織間同士のつながり、組織横断的なつながりをつくる。

③ 高めあう「質」

構築されたネットワークをとおして、 $1 + 1 = 2$ に留まらず 3 以上となるような相乗効果が発揮される「日本のよりよい国際協力」の実現を目指す。

(2) 研修テーマ

「とことん語ろう お互いの疑問を。日本のよりよい国際協力はどうあるべきか」をテーマに、NGO スタッフ、JICA スタッフそれぞれの参加者の経験とノウハウを持ち寄って意見交換を行う。

(3) 主催

独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター (JICA 兵庫)

独立行政法人国際協力機構大阪国際センター (JICA 大阪)

(4) 研修期間

2006 年 11 月 25 日 (土) 14 時 00 分～11 月 26 日 (日) 14 時 30 分 (1 泊 2 日の合宿形式)

(5) 研修場所・宿泊場所

JICA 大阪 (大阪府茨木市西豊川町 25-1)

(6) 研修経費

研修にかかる経費 (教材費、JICA 大阪での宿泊費など) はすべて JICA が負担。研修参加に要する交通費は、JICA の規程により支給。昼夕食代は参加者負担。

(7) 研修実施体制

① ファシリテーターとして、参加型開発研究所の中田豊一代表を選出し、JICA 兵庫、JICA 大阪が (特活) 関西 NGO 協議会と意見交換を行い、研修内容、実施運営について協議の上、決定した。

② 研修当日は、JICA 大阪、JICA 兵庫から各 1 名 (計 2 名) が事務局として運営を行った。

(8) 日程

11月25日(土)

13:00	集合
13:20-13:30	開講式・事務連絡
13:35-15:10	ブレインストーミング 事前アンケートの共有、自己紹介
15:10-15:15	休憩
15:15-18:00	全体ワーク NGO-JICA 連携の実際をととした現状の課題(意見交換)
18:00-18:20	休憩
18:20-19:30	グループワーク ODA と NGO は本当に連携する必要があるのか(意見交換)
19:30-21:00	夕食・懇談会(会費制 2,000 円/人)
21:00-22:00	グループワーク(任意)

11月26日(日)

08:30-10:00	グループワークの発表 各グループから発表後、意見交換
10:00-10:10	休憩
10:10-12:30	全体ワーク なぜ国際協力をするのかについて各自の動機の共有
12:30-13:00	昼食(各自負担)
13:00-14:30	全体ワーク NGO および JICA が連携するために、自分たちはどう変わるべきか
14:30-	解散
14:40-15:00	JICA 兵庫、JICA 大阪、関西 NGO 協議会による振り返り

(9) 参加者リスト(敬称略 順不同)

NGO 側参加者

	名前	よみがな	所属
1	高垣 隆博	たかがき たかひろ	(財)PHD協会
2	阿門 朋子	あもん ともこ	(特活)アジア眼科医療協力会
3	井川 定一	いかわ さだかず	(特活)アジア日本相互交流センター
4	今里 拓哉	いまさと たくや	(特活)アジアボランティアセンター
5	藤野 達也	ふじの たつや	(特活)関西 NGO 協議会
6	榛木 恵子	はりき けいこ	(特活)関西 NGO 協議会
7	足立 真理子	あだち まりこ	(特活)篠山国際理解センター
8	岡田 千賀子	おかだ ちかこ	(社)日本国際民間協力会

JICA 側参加者

	名前	よみがな	所属
1	田邊 秀樹	たなべ ひでき	JICA 九州 業務第 1 チーム
2	木梨 陽子	きなし ようこ	JICA 中国 業務第 2 チーム
3	山本 美奈子	やまもと みなこ	JICA 兵庫 業務チーム
4	高田 健二	たかだ けんじ	JICA 兵庫 業務チーム
5	飯田 次郎	いいだ じろう	JICA 兵庫 業務チーム
6	大西 雅巳	おおにし まさみ	国内事業部 市民参加協力グループ
7	稲生 俊貴	いなお としたか	地球ひろば 企画グループ
8	岩崎 理恵	いわさき りえ	人間開発部 第 1 グループ
9	二見 伸一郎	ふたみ しんいちろう	JICA 大阪 業務第 1 チーム
10	小林 実	こばやし みのる	JICA 大阪 業務第 1 チーム
11	伊藤 公男	いとう きみお	JICA 大阪 市民参加協力調整員

ファシリテーター

	名前	よみがな	所属
1	中田 豊一	なかた とよかず	参加型開発研究所

事務局

	名前	よみがな	所属
1	大井 明子	おおい あきこ	JICA 兵庫 市民参加協力調整員
2	鍋田 肇	なべた はじめ	JICA 大阪 業務第 1 チーム

4 研修内容

今回の研修は、ファシリテーターの中田豊一氏の意向により次の2つの方針が提案され、参加者の同意を得られたことから、その流れで展開された。

- (1) スケジュールは固定せず、進行状況に応じて、参加者と意見交換しながら決定する。
- (2) 「互いを知り合う」、「意見交換を行う」をとおし、深く議論して課題を明確にしていく。

具体的には、次のような展開となったので、これから、その内容について概要を記載していく。

- (1) 開会式
- (2) ブレーンストーミング
- (3) 全体ワーク「NGO-JICA 連携の実際をとおした現状の課題（意見交換）」
- (4) グループワーク「ODA と NGO は本当に連携する必要があるのか（意見交換）」
- (5) グループワーク「NGO および JICA が連携するために、自分たちはどう変わるべきか」
- (6) 振り返り

(1) 開会式

関西 NGO 協議会代表理事の藤野達也氏から、「東京でやっている研修を単に関西で開催するというだけに留まらない内容で考えたい。具体的に、それぞれの立場からみて疑問に思うことをぶつけ合い、小手先の答弁ではなく掘り下げた議論ができることを期待している」との挨拶がなされた。



(2) ブレーンストーミング

事前アンケートで、参加者全員が「連続する3日間の予定」を記載しているので、時間を確保し、その内容を共有した。その後、参加者全員が「自己紹介、参加者の事前アンケートをみた感想、自分の担当業務の紹介」を行った。アンケートの感想としては、「NGO も JICA も、遅い時間まで仕事をしている状況は同じだということがわかった」、「仕事中心の生活になっている傾向は、どの団体もかわらない」との意見が多かったです。また、「読書や勉強といった自己研鑽にかかる時間が限られていることに気づいた」という意見もでてきた。



(3) 全体ワーク「NGO-JICA 連携の実際をとおした現状の課題（意見交換）」

本ワークは大きくわけて2つの内容を行い、その構成は次のとおり。

① NGO、JICA による連携事業の経験の共有

事例紹介として、日本国際民間協力会（NICCO）が現在ヨルダンで実施している草の根技術協力パートナー型案件および JICA 中国がコンサルテーションしたインドネシアでの草の根技術協力支援型案件について、それぞれが説明および意見交換を行った。

②その経験から見えてきた連携上の課題についての意見交換

参加者全員が本質的な疑問として、NGO と JICA の連携においては、3つの課題があることが共有された。この全体ワークでは、課題を抽出することが目的であったため、これらの課題をその後のグループワークで深化させていく進行とした。

- (1) NGO はそれぞれ得意分野や活動地域との関わりから活動がスタートしている。他方、JICA は国別に重点支援分野が政策的に決まっており、その双方の分野や地域が合わないときは、連携そのものもできない場合もある。「市民の発意」と「国の協力政策」がかみ合わないときには連携しないものなのか、あるいはそれでも協働すべきものか。
- (2) NGO が委託事業をしていると、JICA からは事前審査、契約、会計報告については注文を受けることがあるが、プロジェクト内容についてのコメントや協働で取り組む経験はほとんどない。この現実をどのように考えるのか。
- (3) そもそも NGO と JICA が連携することのメリット、デメリットについて、NGO 側、JICA 側の認識は同じものなのか異なるのか。

(4) グループワーク「ODA と NGO は本当に連携する必要があるのか（意見交換）」

参加者を3つのグループに分けて意見交換を行い、それを発表した。それぞれのグループによる発表要旨は次のとおり。(敬称略 順不同)

① 第一グループ（藤野、阿門、井川、稲生、大西および山本）

JICA が NGO と連携する理由は「ODA 理解促進」が一因であるし、NGO が JICA と連携する理由は、「JICA のネームバリューと行政からの信頼を受けられること」が一因である。ただ、それだけではなく、連携することでよりよい国際協力を行うことができるようお互いになっていくことを期待するという側面もある。NGO からすれば、JICA がどのような基準でパートナーとして連携する NGO を選別しているのかについても関心がある。ただ、NGO 側からすれば、政府や JICA ご用達の団体になることについては、抵抗を感じる部分もある。



② 第二グループ（足立、高垣、今里、飯田、二見および木梨）

このグループは現場をもっていない NGO が多かったので「具体的な連携のあり方」という直接的な話はしなかった。ただ、官と NGO の連携は、コミュニティ（郷、地域共同体）の必要性・重要性が再認識されるなかで、必然的に官（行政、役所など）と一般市民の間にあるものとして、官と NGO は連携していくものであるとの認識で一致した。また、連携するにあたり、その関与の度合いはどの程度が望ましいのかについても話し合い、双方の歩み寄りをするなかで「ほどほどの付き合い」が妥当との結論に至った。



③ 第三グループ（榛木、岡田、田邊、高田、小林および岩崎）

連携のメリット・デメリットの主な意見は、次のとおり。

	NGO の視点	JICA の視点
メリット	NGO のスキルアップにつながる。 資金源として大きい。	JICA にはない知識・経験を有する。 JICA へのよき批判者である。
デメリット	文書や経理の手続きが煩雑。 制約条件も多い印象を受ける。 担当がすぐ変わる。対応も異なる。	JICA の制度の理解ができていない。 連携は手間がかかる。

メリット・デメリットを議論する過程のなかで、JICA 内部で市民参加協力事業がどのように位置づけられているのか不明瞭であるとの指摘が JICA 側の参加者からでてきた。すなわち、そもそも JICA の中で市民参加協力はさほど重視されていないため、連携の必要性も感じられない場合もあるのではないかという指摘でもあり、全体発表でも意見交換もなされた。また、全体発表の際に、JICA 側参加者から JICA の実施する市民参加協力事業と対象者を整理した「国際協力参加メニュー」と「キャリアパス試案」が提示され、それについての意見交換もなされた。NGO 側の参加者からは、「NGO にはキャリアパス、ステップアップという発想がない」「コンセプトペーパーをつくる場合は、NGO も加えて参加型で作成すべし」との意見もあった。



(5) グループワーク「NGO および JICA が連携するために、自分たちはどう変わるべきか」

グループワークを開催する前に、各自が「国際協力の世界に参画しようとした動機、これまでの経緯、組織または個人として開発途上国の開発をどのように考えているか」について発表した。その後、NGO 側 2 グループ、JICA 側 2 グループに分かれて、「よりよい連携のために、自分たちはどのように変わるべきか」というテーマで意見交換を行い、発表した。(敬称略)

① NGO 第一グループ（藤野、足立、今里および岡田）

事業の質を NGO のプロフェッショナルとしてレベルアップさせる。そのためには、財政基盤の整備、最低限の事務処理能力の向上、組織体制の強化などが必要。

② NGO 第二グループ（榛木、阿門、高垣および井川）

「市民益」「国益」というボトムラインのビジョンを共有することが重要。NGO と JICA のそれぞれの強み・弱みを認識し、双方向のコミュニケーションを充実させていく。また、NGO 同士のコミュニケーションの充実、マネジメント能力の向上も不可欠。

③ JICA 第一グループ（飯田、田邊、二見、大西および岩崎）

NGO 支援ではなく NGO 連携というスタンスが重要。市民参加協力についての認識が JICA 内で曖昧な部分もあり、限られた JICA スタッフだけが連携の重要性を考えている状況を変えていく必要がある。

④ JICA 第二グループ（稲生、高田、木梨、小林、山本および伊藤）

JICA として NGO 連携に関するポリシーを明確にするとともに、連携にかかる制度（契約、予算、採択方法など）を柔軟にしていく。また、NGO のスキルアップを支援する制度や市民参加の担当者が出張しやすい制度も構築していく。

各グループの議論のポイントを比較すると、NGO は自分たちの体制整備や能力向上を論点にしていることに比べ、JICA は NGO 連携の概念整理や連携のための制度改革を論点にしているところに違いがある。

(6) 振り返り（中田、藤野、榛木、鍋田、稲生、高田および大井）

運営にかかわったスタッフによる今回の研修を振り返り、次のようなコメントがでた。

- ① 議論をつきつめるところまでは至らなかったが、出発点として意味はあった。
- ② 「何のための連携するのか」を常に念頭におきながら、技術論に至らず議論をしていく場は重要であり、このような対話ができる場面として意義ある研修だった。
- ③ 市民参加協力事業は、JICA のなかでも重要な業務ということであれば、本研修を全体研修に入れるということも重要。

5 NGO-JICA 相互研修（関西版）アンケート集計結果

①- (1) 今日のプログラムはどこで知りましたか。

	NGO	JICA	計
職場で案内があった	2	7	9
関西NGO協議会のHP	1		1
知人からの紹介	2	1	3
その他		3	3

①- (2) 日程はどうでしたか。

	NGO	JICA	計
長かった			
ちょうど良かった	5	7	12
短かった		4	4

①- (3) 次回もこのようなプログラムがあれば

	NGO	JICA	計
ぜひ参加したい	1	4	5
参加すると思う	3	5	8
どちらとも言えない	1	2	3
参加しない			

② 11月25日のプログラムについて

	NGO	JICA	計
非常に良かった		1	1
良かった	5	10	15
余り良くなかった			
良くなかった			

【NGOコメント】

- 実際にJICAで働く方々と会い、話や考えを聞くことにより、今まで積もっていたJICAに対する負のイメージが和らいだ。
- 私たちは初めて国際援助に参入するということで、草の根の事業についての大枠のようなものがわかったように思います。
- セミナーメニュー～夜懇親会共に、刺激になりました。相談したり共感したり、違いを感じたりの一日でした。
- 少し長めの自己紹介だったが、結果、お互いを知ることにより、良い機会だった。その後のグループワークでは様々な立場からJICA-NGOの連携を知るきっかけとなり、充実した時間だった。
- それぞれの参加者の活動や、個人についてまず知ることができ、そこからJICA、NGOという背景を持って話すことができたので良かった。また、JICA側でも様々な人がいて、問題意識の持ち方や考え方が異なることに、当たり前のことではあったのだが驚きを覚えた。連携について具

体的な事例で話した際は、当日参加者が興味を持った事業について話ができただけでは良かったが、あらかじめ主催者側で実際の事業を用意しておき、その内容についてディスカッションしても良かった。事業内容自体ではなく、もっと連携について話ができただけと思う。

【JICAコメント】

- ◆ 長めのアイスブレイクをとることで参加者同士の関係が良好になり、率直な意見もではじめるようになった。グループワークでは、NGO-JICA 連携のメリット・デメリットの話をしたが、時間が短すぎて十分な議論をするには至らなかったのが残念。
- ◆ 中田さんの司会や進行状況に応じた軌道修正など、ファシリテーターとしての能力もすばらしいと思った。
- ◆ 他の人のいろいろな意見や情報が聞けて、有益であった。
- ◆ 若干自己紹介の時間が長い気がしたが、自分にとっては初めての機会でもあったので色々と参考になることも多かった。
- ◆ 研修のフレームをつくっていく過程から本研修が始まるという設定が心地良かった。「NGO と JICA との連携」が、草の根技術協力事業という限定的な状況で意見交換されることが多かったが、そこを入り口としてもっと間口を広く「連携」を考えられるような意見交換に持って行きたかった。
- ◆ 自己紹介で時間を長く取ったのはよかったが、本題の議論の時間が少なくなったように思う。
- ◆ お互いの立場、業務内容が良く理解でき、その後の作業の進め方が容易になった。
- ◆ 3 日間の日常を記入したアイスブレイキングの進め方は面白かった。所属団体は違っても日常の生活リズムにそう大差はないと思った。日常に飲み会が入っていたり、睡眠時間が妙に遅かったり特徴のある人もいて、面白い内容だった。また、自己紹介を通じて取り上げた、「おじいちゃんと孫娘」、「ヨルダンパーマカルチャー」の草の根技術協力事業の二つの事例は、事業自体も、そして連携を考える観点からもとても興味深かった。そして「ODA(JICA)と NGO は本当に連携する必要があるのか」というテーマのもと、私たちのグループ(榛木、岡田、田邊、高田、岩崎および小林)は NGO 側、JICA 側のメリット、デメリットを書き出して行ったが、この部分議論を深めるには時間が短かく残念だった。懇親会は、私生活を通じていろいろな方々の仕事、人生、考えなどを聞くことができ、楽しかったし、同年代の方のお話は自分にとって非常に刺激的だった。懇親会だけでもこの研修の価値がありました。
- ◆ 決まったプログラムがなく、この後どうなるのだろう、という適度な緊張感があってよかった。具体的な事例紹介(ヨルダン、インドネシア)も事前の準備なく行われたものだったので、返って無駄な詳細説明が省かれ、担当者の生の声が聞かれ、議論もしやすかった。そもそも論である「NGO、JICA は連携すべきなのか」から議論することができ、普段、市民参加事業に携わっていない自分でも意見交換がしやすいテーマでよかった。
- ◆ 最後のところ(26日)で本質的な議論(NGO-JICA 連携って何か。そもそも「国際協力」を何のために実施するのか。どのような連携が本質的に必要かなど)になり始めました。もう少し突っ込めば、第一回なりの「課題整理」まで行けたのではと思いますが、それには、あと2~3時間足りない感じでした。1泊2日の事業でできる内容という、ある程度の限りがあるとは思いますが、もしかすると25日のプログラムでももう少し頑張る手があったかも知れないとは思いますが。勿論、全体として25日のプログラムは、良かったと思います。
- ◆ アイスブレイキングや最後の感想であれだけの時間を使ったのは初めてでしたが、参加者それぞれの思いをぶつけ合うにはよい出だしだったと思う。NGOの方々も、それぞれ忙しいお仕事の毎日

を送っていることが改めてわかり親近感を持った。夜の懇親会やグループディスカッションでの話し合いをもっともっと続けたいと感じた。

③ 11月26日のプログラムについて

	NGO	JICA	計
非常に良かった		2	2
良かった	5	9	14
余り良くなかった			
良くなかった			

【NGOコメント】

- 個人的には、漠然としたイメージのディスカッションとなり、ついていけていたかどうか自信がないです。その分、心に残り、後日繰り返し考えたりしています。「NGO と JICA のより良い連携」これから実務をこなしながら、頭のどこかで考えていると思います。
- NGOとJICAの連携についての様々な問題や課題があることを知りました。
- この日も参加者の国際協力に携わることになった様々な動機を知ることができ、自分と比較できたことは楽しかったしよい参考になった。NGO、JICA に分かれての意見交換では、それぞれの側の率直な意見が聞かれ、今後につながる2日間の締めになったと思う。
- それぞれにチームに分かれて、JICAとNGOで話し、その後分かれて自分たちを省みる内容を話すことができよかった。NGO内でも様々であり、一括りで見られることの怖さも感じつつ、内情を整えて、JICAとも対等に話ができる基盤を作る必要を感じました。他のNGOと話すことで、自分たちの課題がはっきりしたことも良かったです。一点挙げるとすれば、2日目はNGO側の出席者が少なくなったこともあり、前半でのディスカッションが、JICA内でのディスカッションのようになり、あまりNGOが参加できていなかったのではないかと思います。

【JICAコメント】

- ◆ いつも細かい作業に追われているので、「よりよい国際協力とは？」をめぐって熱く議論を闘わせたのは、とても新鮮な体験でした。NGOとかJICAとか関係なく、国際協力に関心のある人たちが立場を関係なくこのようなディスカッションをすることは非常に大切だと思いました。ただ、後半の具体的なディスカッションになるにつれ、既存の枠内、つまり現在のNGO-JICA連携のスキーム中心の議論にならざるをえなかったのが、そのスキームに不慣れな自分はディスカッションについていくことが難しかったです。
- ◆ 朝の時間に5分遅れた人は1名のみであったので、大変まじめであった。
- ◆ 「なぜ国際協力をするのか」というテーマはよいと思った。これは、際限ないかもしれないが、最も重要であると思う。
- ◆ 国際協力に参加した動機について参加者全員で共有したのは、貴重な時間だった。
- ◆ その後、JICAやNGOはどのように変わるべきか、という議論は、時間が十分ないまま終わってしまったのが残念。ただし、この課題は今後持ち帰って検討していくべき内容と思うので、14時30分に予定どおり終わったのはよかった。
- ◆ 連携の方向性を探る上では時間が少なく考えを整理・展開できなかった。
- ◆ 自分が国際協力を始めるきっかけのような話しに時間を長く取ったのはよかったが、本題の議論の時間が少なくなったように思う。

- ◆ 最終的に連携のためにすべきことについての話がまとまったのは良かった。
- ◆ 少人数のグループにならざるを得なかった（何れのグループも）ことも影響したのか、議論を深めるところには至らなかった。ただ、日常では実現しにくいコミュニケーションの場ではあり、最初の一步としては上々の成果と感じた。
- ◆ 経緯、動機、目的の話はとても興味深かったが、できれば懇親会の前に聞いたらもっと懇親会の話が深められたと思う。「国際協力の目的を踏まえて、よりよい連携のために私たちはどう変わるべきか」という議論は、結果的に本質の部分を十分に話し合うことができず、今ひとつ消化不良の感じがした。
- ◆ NGO、JICA と分かれてよりよい連携のためにできることを話し合ったが、前日の議論を踏まえ連携がもたらすプラスの面を最大化できるようお互いがさらにどう変わるべきかについて意見が出され、生産的なアウトプットが出たので良かった。
- ◆ 最後のところで本質的な議論になり始めた点、とても良かったと思います。ただ、前日に少しでもさわりの議論ができていたら、最終日の進度がもう少しあったかも知れない、との思いは残りました。（しかし、これは実際のところどうなのか（可能かどうか）、良く分かりませんが。）
- ◆ グループディスカッションで提案した市民参加のチャートを発表で説明させてもらったのが一番ありがたかった。JICAの発想で作ったのは確かだが、「ステップアップという発想はNGOにはない」などのNGO側から見た印象や意見については、聞いてみないと分からないものだと痛感し、こういった場の重要性を再確認した。

④ この研修で、ご自分の活動・仕事に役立てられる収穫は何でしたか。

【NGOコメント】

- とにかく、全ての人の一言一句が収穫です。勉強になりました。
- 直接活動や仕事に役立ちそうな収穫というものはなかった。強いて言えば、「刺激を受けた」こと。
- 右も左わからない状態から少し草の根事業について知ることができた。
- 自分たちの組織をもう一度見直見直さなければならないと思った。
- 初めてJICAの方たちとゆっくりリラックスした雰囲気の中で話せ、所属団体が今後どのような形で連携していけるのか考えるいいきっかけになった。今後につなげていきたい。
- JICA九州の田邊さんが作られた内部資料は、NGOにとって、今どのレベルに位置しているかがわかりやすく、また他にもどのような位置づけに支援策があるかが明確となったので、今後に生かしたい。また、JICA内部でも様々な考え方を持った人がいることを知り、変えようとしている人が少数でもいることに頼もしさを覚えた。今後は、もっと積極的に相談に乗ってもらったり、情報提供を行っていきたいと思った。連携の根本的な問題は、しばらく解決することはないと思うが、NGOが力をつけ、それぞれの立場でプロフェッショナルな仕事をするまでは仕方がないと思う。

【JICAコメント】

- ◆ 国益、市民益、コミュニティ、日本国内の問題、外交目的、安全保障、「何のため」…。もう少し時間があればよかったが、これらを話し合う土壌があるということがわかった。
- ◆ 理念を共有すれば、立場が違って、事務手続きで様々な支障があっても乗り越えられるのではないかという小さな確信を持った。その理念がぶれたり、ぼやけていては、共有はできないし、お互いにわかりあうこともできないので、相手に遠慮ばかりしているのではなく、時にはこちらの理念

をドーンと相手にぶつけて仕事をしてみようと思った。

- ◆ 同じような問題意識をもっている JICA の同僚の存在を知ることができたので、その人たちと今後も継続して話をしていきたいと思う。
- ◆ 中田氏のファシリテーションのやり方も参考になった。
- ◆ 過去の事例への意見交換や「開発の概念」などを定義するよりは、直接相手に対しての疑問をテーマとして語り合うことは有益だった。このような議論を NGO と合同でできたことがよかったので、今後もパートナーとして様々な議論を今回の参加者も含めて進めていきたい。
- ◆ 「JICA が NGO に期待すること」の課題を作成するための材料
- ◆ 国内機関担当者との意見交換
- ◆ 地域における各 NGO の立場・業務内容の違いが他の地域やそれぞれの間でより明確に現れたことから、それぞれとの連携を考える上で一概に検討することは正しい選択肢ではないことを再認識できた。
- ◆ 日頃から付き合いのあった団体と改めて意見交換できたこと。(今まで以上に顔が見えるようになった)。
- ◆ NGO 側の本音の意見はすべて参考になった。特に草の根事業については、手続きの簡潔化が現実のものとなるよう、我々センターから本部へももう少し発信していかなければと思った。
- ◆ NGO と JICA の連携事例を少しではあるが、具体的に知り・考えることができたこと。
- ◆ NGO 側から JICA を見る目が少しではあるが分かったこと。
- ◆ 今後、小さいことでも相談しやすくなったこと。
- ◆ NGO の方々とのネットワーク、国内機関担当者とのネットワーク。
- ◆ 2日目、全員が、「国際協力の世界に入った経緯」、「今の仕事に就いた動機・目的」、「私たちは国際協力を何のためにするか」について話しましたが、その結果出てきたものは、NGO 側参加者と JICA 側参加者の間で、明確に異なるとは(私には)思われませんでした。そうであれば、今後、「より良い国際協力とは？」を一緒に考えて行く場合、かなり議論がかみ合い易いし、興味深い結果が出そうだな、と感じたことが大きな収穫でした。他方、違う点が明確にならなかったことは、もしかすると、今回、到達できなかった弱点なのかも知れません。
- ◆ いわゆる「市民参加」のための取組みが、最終的にどこを目指すものなのか、そのために NGO と JICA がどのような場面で連携・協働できるか、NGO 自身はどこを目指しているのかなどについての議論が大変参考になった。また、これを参考に担当している NGO との共同事業の審査や実施など、職場での議論や日々の仕事に生かしていくとともに、JICA の市民参加協力事業さらには国内事業全般にわたるビジョンや方向性について、議論を重ねて発信していきたい。

⑤ この研修をとおして「新たな発見事項」、「再確認したこと」は何でしたか。

【NGO コメント】

- どんなくもコミュニケーション能力を問われるのだということ、コミュニケーションの重要性を再確認しました。
- JICA は行政で NGO は市民という対極にあるもので、それでいて国際協力の同士であるという連携をうまく機能させるのは、人と人の出会いとつながり、コミュニケーションの深さなのだろうという気がした。
- 自分の所属団体 (AOCA、NGO) の責任、方向性を考えました。

- JICA と NGO、違いと共通点を再確認し、共感できることもあると認め合ったことで、上下感覚ではなくフラットな意識を持つことができました。
- 困難な状況でも、力強く楽しく仕事をしていきたいな、と思ったりもしました。
- JICA 職員の方々も真剣に開発や NGO との連帯を受け止めているということ。
- 真剣に NGO との連帯を考えているにもかかわらず、一部の大きな NGO とその活動方針しか見えていないこと。
- 他団体で働く人の 1 日の仕事内容が知れたことは、自分の 1 日の仕事の流れを見直すことにつながられるのでよかった。
- JICA 内部で様々な考え方があることを発見した。双方が協力し合おうとする姿勢が大切なことを再確認した。お互いなくてはならない存在というわけではないが、協力し合うことでより良い国際貢献ができることも感じた。

【JICA コメント】

- ◆ 参加者のバックグラウンドを知ることができて、興味深かった。
- ◆ NGO の人たちも、多様な忙しい業務をこなしていることがわかった。
- ◆ JICA の国内機関では、市民参加協力事業の明確な方針がないために、ベクトルが定まらず混乱をきたすこともあるが、NGO サイドでも JICA の方針がないために振り回されている事例（例えば、国別事業実施計画との整合性が必要だったり、必要なかったりというケース）があることが新たな発見だった。
- ◆ JICA の NGO 関連の制度（草の根、相互研修など）については、手続きが煩雑であることや、事業内容に対しての JICA のコミットメントの少なさが浮き彫りになったので、その点についてどのような改善が図れるのか考えていきたい。
- ◆ NGO のスタッフも相当忙しい中で仕事をしていることがわかった。研修をやる場合でも、ゆったりとした企画内容にした方が、心身ともによいと思う。
- ◆ このような企画が関西であるのは、西日本の参加者にとっては有益だと再確認した。
- ◆ JICA や ODA のメインターゲットは「フォーマル」である一方、住民・コミュニティレベルの要望は「インフォーマル」であることが多い。そこに対応できるのが NGO などであることを再認識できた。
- ◆ ODA (JICA) と NGO が連携する必要があるのか、という根本的な問いを考える貴重な機会であった → JICA は完全なリソース集団ではなく、コーディネート・マッチング・マネージ機能を期待された実施機関であり、JICA 外部 (NGO 含む) の協力無しには事業展開が不可能であることを再認識。他方、NGO も、JICA (ODA) という行政ブランドを得ることで、活動の幅 (財政面も含む) や信頼度のアップにつながるというメリットを再認識。
- ◆ 関西方面と関東との NGO を取り巻く環境・それに伴う性質の違い、ネットワーク NGO の体力差。
- ◆ 国際協力に携わるにあたって、皆様は個人の想いや経験をお持ちだというのがよく分かった。
- ◆ JICA はスキームの改善に意識があるようだが、NGO にとっては事業の中身が大切で、スキームのことにはあまり関心がないようだった。
- ◆ 直接顔を突き合わせて話をすることの重要性を再確認した。技プロやボランティア事業と違い、JICA 全体での市民参加の位置づけがあまりはっきりしていない現実が改めて浮き彫りに…。今後もこのような研修を継続する場合、この点については、JICA 側としてももう少し明確にさせなくてはならない点かと思われる。
- ◆ NGO 側の視点から JICA の連携の意義をいろいろ学べたこと。

- ◆ 隣のチームで担当している草の根案件の具体的内容をはじめよく知ることができたこと。
- ◆ また会って話をしたい人とたくさん出会えたこと。
- ◆ 自分と似たような経験をしている人と合せて、また他の道を知ることができたこと。
- ◆ JICAの世界ってやっぱり狭いなあと思えたこと。
- ◆ 市民参加事業も ODA スキームの一つであり、戦略的に考える必要があるということ。これまでどちらかという市民参加事業は市民の発意の活動であり、市民がやりたいことを実現できればそれでいいのではないかと、それを支援するのが J I C A の役割のように感じていた。しかし、NGOの方々から、J I C A は報告をしても何のレスポンスもない、事業内容にはほとんどタッチしないという意見を聞き、もっと J I C A として主体的に事業の中身にも関わり、途上国の開発課題の解決に草の根事業を含む全ての活動が資するように切磋琢磨していかなければならないことを感じた。と同時に、市民参加事業にはさまざまなレベルや趣旨の異なる活動が混在しており、ある程度の整理が必要という問題意識をもった。九州センターの田邊さんが提示されたペーパーはその一歩になると思う。
- ◆ NGO側からODAを見て、「この点は要改善」と見えるだろうと私が想像していたことの一つに、「ODAは相手国政府への協力なので、人権問題がある点や汚職がなくなる点、弱者への配慮ができていない点など、今の政府に対し、それら課題を不問に付す形のまま応援してしまっている」という部分が、大きいと思っていました。言い換えると「もう少し政策提言（内政干渉と言われぬ配慮をしつつ、できるだけ相手国のガバナンス改善に提言）を加えるべき」というような意見が出るだろうと思っていました。今回、そこまで突っ込んだ議論には至りませんでした。それでも少し出た点として、「何故、スリランカにおいて、陶磁器のデザインに関する協力が優先課題なのか理解困難」というものがありました。私自身、スリランカの協力案件を良く知らないのですが、この手の議論は有意義と思いました。J I C A 大阪という同じ J I C A 内から見てもこの疑問は十分あり得るので、J I C A 外からは至極自然な疑問と思います。NGO側（または市民）から見た疑問の一側面であり、私には一つの発見といえます。

⑥ この研修の改善点は何かと考えると

【NGOコメント】

- 土日にも仕事が入る NGO 職員がより大勢参加できるよう、開催日をもっと事前に掲示すること
- 部屋の空調（寒かったです）
- 中田氏の考えは良かったが、もう少しプログラムのスケジュールを初日に分かっていただけた。
- やはり、NGOとJICAの人数バランスだと思う。それぞれの立場の中でも、異なる立場の人が出てきたことは良かった。今回の改善点ではないが、この研修が今後どのようにつながっていくかが、この研修の評価になると思うので、よろしくお願いします。

【JICAコメント】

- ◆ 抽象的な議論で終わるのではなく、議論から生まれた具体的な提言を、最後にみなで共有できればもっと良かったのではないかなと思う。
- ◆ もう少し事前に論点を整理したらよいと思った（主催者としての反省）。
- ◆ 討議の仕方として、少数意見が考慮されるような手法をもっと重視してもよい（この手のワークショップではいつも起こりがちだが、防災のワークショップでは活用されているので、機会があれば紹介したい）。

- ◆ 会場借上の費用などとも関係するが、JICA 施設以外でやるのもいいかも知れない。特に NGO 支援の観点から YMCA を含む NGO が有する施設を活用してみるのも一案。
- ◆ NGO の参加者が少なかったので、時期を見直す必要はある。
- ◆ 参加者がある程度マンネリ化している部分もあるので、もっといろいろな人が参加できるような仕掛けを考えていく必要がある。
- ◆ 今後も発展させていくのであれば、何らかの具体的な成果が必要になってくるかと思う。例えば、現在 NGO と JICA で連携を行っている具体的なスキームをひとつ挙げての研修を行うなど(草の根、開発教育支援などが対象か)、かなり限定的な研修があってもおもしろいかと思う。
- ◆ 事前に何をするのか分からなかったので、議論がまとまらなかったような気がした。(それが狙いであればいいのですが・・・)
- ◆ 参加人数と構成。→少人数でバランスの取れた人員。
- ◆ 参加者の偏向。→関係の深い団体にのみならずより多くの団体からの参加者を募る。
- ◆ 開催日程。→遠方からの交通を考慮、3連休以上の連休を利用し休日を捻出するなど日程に余裕を持たせる。
- ◆ 研修当日の予定、研修の進め方など事前に周知あると良い。
- ◆ 参加者が限定的で、小数になってしまったこと。
- ◆ JICA では未だ「市民参加協力」の実際(海外での展開と国内での展開)が理解されていないのが現実と痛感。他の技協スキームなどが「開発への貢献」を直接の目標としているのとはベクトル(姿勢)を異にする本件を、全職員が JICA 職員の基本(ベース)として身につけられるよう、新人研修、1.5次研修、国内機関赴任前研修、10年次研修、管理職登用研修、在外事務所赴任前研修など、あらゆる機会を活用して、周知・徹底をはかるべき。
- ◆ NGO と JICA の連携は海外にも国内にもあるが、特に国内部分について言及できるような仕掛けが必要ではないかと感じる。
- ◆ 冒頭の目的確認の際に、①互いに知り合う、②意見交換、③深める、としたが、今回の議論では③の部分の十分にする時間がなかったこと。
- ◆ フレキシブルな日程で常に主体的に研修に参加できた。一方、主催者(関西NGO協議会、JICA側)は、ここまで話し合いたいという目標を持っていたように思うが、この二日間ではそこまで達せなかったという思いがあったのではないかと感じた(最終日藤野さんのコメントから)。フレキシブルな日程だとどうしても時間は足りなくなりがちで、また今回のディスカッションのテーマは大きかったので、個々のグループによって色々な方向に話が散らばった。個人的にはその過程で色々な方々の本音が見えたりしたので、それが楽しかったが、こういう議論をしてほしいという本研修の目的に足りていない部分があれば、もう少し論点を絞っても面白い議論ができたと思う。
- ◆ 自分自身、企画・運営に参加したのですが、参加者の確保に時間がかかった点、改善が必要だと思います。また、参加者の半分以上は、以前からの知人ですが、私自身、知らなかった参加者との意見交換を十分しなかったとの反省があります。個人的な改善点です。開催時期ですが、もう少し暖かい季節に開催できれば、意見交換が更に活発だったかも知れないと思います。
- ◆ 研修全体の趣旨や大枠を予め明らかにしつつ、当日の運営はスケジュールにとらわれずに出たところ勝負という手法はたいへん興味深い。他方で、参加者が問題意識をあらかじめ整理しておくことが望ましいと思われ、そのためには事前のアンケートに工夫をして、アイスブレイキングへの活用のみならず各自の問題意識や経験を大幅な負担増にならない範囲で記載させるようにしてはどうか。

また、過去のN-J相互研修の成果（N-J間で共有できた認識や意見が食い違ったままの論点、今後の検討課題など）をあらかじめ参加者に情報提供しておくことで、その認識の上に立った議論がはじめからできるようになるのではないか。

⑦ ご意見、ご要望、ご感想など、ご自由にお書きください。

【NGOコメント】

- 個々人のお話が、とにかく面白く興味深かったです。
- 参加できて良かったと思っています。
- 今いる NGO で JICA との連帯事業を行っていないにもかかわらず、この研修に参加させていただき、ありがとうございました。今後もどのように連帯できるか、またはするべきなのかすらハッキリと自分の中で考えがまとまっておらず、少しでも参考になればと思い申し込みました。結果、答えは見つからないが、自分に対する課題が幾つか見付き、この研修に参加できてうれしく思っています。

【JICAコメント】

- ◆ そもそも NGO との連携に疑問をもっているような JICA 職員が参加することにも意義があるので、そうした人たちも参加できるよう、副主任研修や3年次研修などの場面で研修として行うことが望ましい。
- ◆ こうした研修も重要だが、継続して話をしていくことも大切だと思う。NGO-JICA 協議会にその機能をもたせるのか、関西で何らかの取り組みをしていくのか現時点では不明だが、考えてみる意義はあると思う。
- ◆ やはり NGO-JICA 連携を推進するためには、JICA スタッフの海外出張の機会が気軽にできるようになることも重要と考える。その点ぜひ改善していきたい。
- ◆ 人数は、10+10 でちょうどよいと思う。
- ◆ 外務省の存在が脳裏をかすめたが、これは JICA 研修なので、いいのでしょう。
- ◆ このような国内の地域で行う研修は、市民参加事業が各地域の固有性を濃く反映していることから奨励すべきと思う。
- ◆ 普段の仕事では NGO のスタッフ、しかも若手の方とお話する機会はあまりないので、とても貴重な体験でした。JICA の1年次研修などで、同じように若手の人材育成を考えているネットワーク型 NGO と組んで意見交換会をするということも一案だと思います。ただし、今回のセミナーのように NGO、JICA 双方とも年齢、性別、バックグラウンドがさまざまな人々が集まる研修も、多様性から学びあうという点では非常に良かったので、ぜひ続けてほしいです。
- ◆ 一定の成果を出すことが目的ではなく、他者を知る、理解する・し合う、意見交換するというプロセスを共有することが本研修の目標・目的だったと理解するので、その点では満足です。ただこの1回で終わっては何にもならないので、今回のメンバーをコアとして、参加者を拡大（募る）ことで次回以降を企画されたい。
- ◆ JICA 全体として市民参加の重要性を考えるならば、このような研修を職員なら一度は受ける仕組みを作るべき。新人研修などでは NGO の話はほとんどなかった気がする・・・。特に市民参加に関わっていない職員でも、市民参加に関わる重要なアクターである NGO の話を聞くこと（その他自治体でもいい）は非常に勉強になる。実際、このようなスキーム自体あることを知らない職員が多いのでは？

- ◆ 一部の方は、「今の先進国の後を追うような国を作るための援助のあり方でいいのか」、「途上国の貧困の原因は先進国の側にもあって、先進国側がまずそれを改めるべき」といった根本的な議題について議論したがっていたようだった。そのような議論に個人的には興味があったが、自然発露的にそのような議論になることを期待するのは無理があるように思われた。(JICA では、ほとんどそのような観点はもたれていないと思う。) もしそういった議論をするのであれば、きちんと誘導する必要があると思う。
- ◆ 「NGO-JICA 連携」のような研修を義務付けるのは少々過激だと思う。我々は関係者なので必要性は感じるが、強制となると行き過ぎのような気がする。「市民参加協力事業」について、もう少し深く理解してもらおうぐらいの内容であればできるかもしれませんが。(NGO=市民ではないと思うし、NGO と JICA が連携する必要があるかどうか議論があるでしょうし。)
- ◆ 研修は意義があることですが、本研修自体も東京開催分、NGO 関西協議会や他の NGO、あるいはその団体の研修などと連携して案件遂行上の問題点を事例を元に検討するなど、一部に実務的な内容も盛り込むことで現実感を持たせる工夫も必要と存じます。
- ◆ 本研修は若手職員の市民参加への意識を高めることに有効かつ同じく国際協力の現場で事業を行っている NGO との関係が構築できることから「新人研修」などに組み込むことが望ましいと存じます。
- ◆ 当初、土日の 2 日間掛け研修に参加し、何が得られるのか具体的なイメージが沸かず、参加意欲がわからなかったが、NGO の人や考え方をすることで自身の仕事内容や取り組む姿勢など振り返って考える機会ともなって良かった。連携は考えれば考えるほどもやもやしてきたので、またみんなが集まって話し合える機会があれば是非参加したいと思います。また、JICA の研修の中に強制的に入れ込むことは、また新しい視点からの意見もあり活性化すると思うので賛成です。ただし、この研修は相互にメリットが得られることが重要だと思いますので、参加者のバランスや目的意識の確認は必要かと思います。NGO 側、JICA 側の実施・運営に携わった皆様本当にお疲れさまでした。
- ◆ 最後によりよい連携のためにどうあるべきかという話し合いで、市民参加事業について JICA 職員一人ひとりが内容を理解し、技プロ、本邦研修、専門家派遣、無償、有償等々と並んで市民参加を一つのツールとして理解する必要があると考える。全ての事業は連関しているはずで、それで初めて相乗効果が得られるはずが、現時点では市民参加事業は他スキームから独立して考えられているように思う。(個人的には JICA の広報事業も独立しすぎていると感じている。) まずは個々の職員が市民参加事業を正しく理解するよう全員研修などで周知を図るべきと考える。その前に複雑な市民参加事業(少なくとも JICA の行っている事業)について整理した上で紹介されるとより理解はしやすい。また、研修は座学ではなく、今回の研修のような参加者に考えさせるワークショップ形式を望む。
- ◆ 次回を計画するとして、今回の参加者をコアに意見聴取し、何をどこまで議論するか、考えて行かないといけないと思います。他方、次回ありきでなく、自然と意見が出てくるならやる、というのも正論でありつつ、本当に自然に意見が出てくるかどうか、何らかの仕込みが必要でないか、慎重に考えたいと思います。
- ◆ こういった研修で得た相場観を共有するため、JICA 職員や内部関係者の間でもっと広く NGO 連携や市民参加協力の意義やあり方について議論していく必要があると感じた。そこは職員の自己研鑽に任せることなく、JICA 全体として市民参加協力事業を本来業務の一つとして認識し、それに携わる職員の数と経験を増やし、共有していく努力が是非とも必要と感じた。

添付資料

- 添付資料 1 第 1 回打合せ議事録 (2006 年 6 月 7 日)
第 2 回打合せ議事録 (2006 年 7 月 3 日)
第 3 回打合せ議事録 (2006 年 7 月 21 日)
第 4 回打合せ議事録 (2006 年 8 月 16 日)
第 5 回打合せ議事録 (2006 年 10 月 16 日)
終了後振り返り議事録 (2006 年 12 月 22 日)
- 添付資料 2 募集要項・チラシ

6 その他資料

(1) NGO-JICA 相互研修（関西版）についての第1回打ち合わせ

日 時 2006年6月7日 15時～17時

会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース

参加者 関西 NGO 協議会 榛木事務局長、宮下職員

JICA 大阪 鍋田チーム長、内藤主査、伊藤調整員、三浦調整員

JICA 兵庫 飯田チーム長、高田職員、大井調整員

<議 事>

1 関西 NGO 協議会コメント

- (1) いま最大の疑問は、「何を目的として NGO-JICA 相互研修を実施するのか」というところである。例えば、前回の PCM 研修は「プロポーザルの書き方の習得」を目的として、PCM という手段を活用した点が優れている。実際にその後、外務省へのプロポーザルを提出する際に役立てたという話もきいている。そのような具体的な目的が JICA から提示されることが先決だと考える。
- (2) 先ず NGO-JICA 相互研修では、何をやるのかという JICA 側の目的を確認したい。また、JICA はこの研修を何に反映させようとしているのか知りたい。それが曖昧なままでは加盟団体に呼びかけをするのも難しいし、取り組む意義はないと考える。
- (3) 今年度関西 NGO 協議会はネットワーク再構築を行っている段階であり、そのためにイベント業務も絞り込んでいる。ネットワーク再構築にあたっては、加盟 NGO 団体へのアンケートおよびインタビューを行っているところである。そのため、新たにイベントを実施するのは容易な状況ではない。
- (4) NGO-JICA 相互研修の目的、研修の切り口、ターゲットについて次回会合で整理していきたい。

2 JICA コメント

- (1) NGO-JICA 相互研修では、東京と同じような研修をやることは想定していない。つまり、東京では、「国際協力を実施するうえでのパートナーとして NGO と JICA 相互の理解促進と、将来の連携に向けた人的ネットワークの形成、そしてそれらをとおした NGO、JICA 双方の若手および中堅職員の人材育成」を目的として、「人間の安全保障」、「自立発展性」および「プロジェクトの評価」についてのあるべき論を、NGO と JICA がともに学びあうスタイルをとっているが、同じことであれば東京研修に参加すればよいと考える。
- (2) 例えば、公開 NGO-JICA 協議会のような集まりを開くのも一案。あるいは、釜ヶ崎訪問をするというような研修を実施するのも検討してみてもいい。一緒に学ぶことで、NGO と JICA の両方が変わると考える。
- (3) JICA としても NGO-JICA 相互研修の目的を整理して、次回会合で意見交換を行うこととしたい。

3 次回会合

7月3日（月）16:00～18:00 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペースにて実施。

(2) NGO-JICA 相互研修（関西版）についての第2回打ち合わせ

日 時 2006年7月3日 16時～18時

会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース

参加者 関西 NGO 協議会 榛木事務局長、宮下職員

JICA 大阪 鍋田チーム長、伊藤調整員、三浦調整員

JICA 兵庫 高田職員、大井調整員

<議 事>

1 関西 NGO 協議会コメント

- (1) NGO-JICA 相互研修を実施する場合の目的を明確にする必要がある。具体的には、①ODA 政策への市民参加による提言、②ODA と NGO 関係者の能力開発、③国際協力全般への市民参加の促進 の3つのうちどれを指向するのか関係者で共通認識を持つ必要がある。JICA と連携して実施するからには「国際協力」の付加価値が必須と考える。
- (2) いくつかの NGO にヒアリングをしたところ、「心身の健康回復」、「資金調達方法や情報収集の手法の学びあい」、「報告力（分かりやすく伝える）の強化」、「2007 年問題シニア世代の受入」、「現場での問題発見のノウハウ」、「参加型事業の評価の指標」、といったテーマに関心があった。
- (3) 2006 年 3 月の NGO-JICA 協議会の場で、榛木事務局長から「地域の自主性を踏まえた企画をやるべき」とのコメントをしているので、そうした自主性を踏まえるためにも、実行委員会形式で、どのような連携や研修を実施すべきか意見交換を行うことが重要であり、丁寧に取り組む意義は大きいと考える。
- (4) NGO と JICA 双方の対話可能な環境作りにつながる企画とする必要がある。ただ、実施にあたっては、交通費や日当などお金がかかってくる部分があり、NGO が参加分を丸抱えするのは困難なので、JICA としてどのような支出が可能かという回答を受けて、興味のある NGO に関われた形で実施していくことが重要と考えている。意見交換の際には、車座トークとしたり、チューターをつけるというような工夫も必要。若手スタッフの参加を促すためには、ダイレクターレベルを納得させる必要がある、「目的」をどうするか、「経費」は誰が支出するのかを明確にする必要がある。

2 JICA コメント

- (1) イベントありきではなく、実行委員会形式で進めていくことは必要なプロセスと考える。
- (2) NGO と JICA にとって、連携可能なことは何であるのか、どのような形で連携可能かという率直な話ができるようになることを指向していくことが重要。そうした話し合いのプロセスをとおして、ODA や国際協力に対する提言をしていくことが実現できればよいと考える。他方、NGO と JICA の対話といいつつも、JICA サイドは市民参加協力関係者が多数になり、他の業務に取り組んでいる人たちが入りにくい側面がないとはいえない。
- (3) 具体的にどのように進めるかは 8 月に協議するとして、実行委員会形式の制度（人選、広報、交通費の支出の可否）について 7 月 21 日 16 時～18 時で打ち合わせを行い、共通認識を持っていきたい。

(3) NGO-JICA 相互研修（関西版）についての第3回打ち合わせ

日 時 2006年7月21日 16時～18時

会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース

参加者 関西 NGO 協議会 榛木事務局長、宮下職員

JICA 大阪 鍋田チーム長、伊藤調整員、三浦調整員

JICA 兵庫 高田職員、大井調整員

<議 事>

1 JICA コメント

- (1) イベントを前提としない実行委員会形式で行う場合、ニーズ調査のような会合に位置づければ、JICAの規定を満たす場合には打ち合わせ謝金および交通費の支出は可能な部分もある。その場合の成果物は、「打ち合わせおよび会合の報告書」になると考えるが、その点もあらかじめ双方で合意しておく必要がある。
- (2) 2006年度は相互研修イベント開催ではなく、2007年度に開催する相互研修のテーマはどうあるべきか意見交換する会議開催に絞るのが適当。その際の議題としては、「NGOとJICAの連携」という手段に焦点をあてるのではなく、「よりよい日本の国際協力はどうあるべきか」という目的に基づき議論を行い、そのためにはどのような研修が必要かということに落とし込むほうがよいと考える。
- (3) その場合、実行委員会メンバーの基準（優先順位、選出方法）は明確にする必要がある。興味本位の大学生が入るような形になっても実務的ではないため、経験年数なども考慮したい。
- (4) 打ち合わせは、市民参加協力班が主として行うとしても、JICA国内機関の研修班の参加を妨げるものではないので、市民参加協力班以外のJICA職員にとっても意義ある会合となるような仕掛けを考えたい。

2 関西 NGO 協議会コメント

- (1) 「よりよい日本の国際協力はどうあるべきか」という議題を取り上げることは、担当の立場からは賛成であるので、理事会でも確認をとりたいと考える。
- (2) 実行委員会方式で開催する場合には、公募形式をとるべきだと考える。特定の団体を指名するというやり方は今回の件では不適切だと考えるので、条件を付し公募するよう関西 NGO 協議会としても広報したい。
- (3) 開催時期、メンバー、どの地域まで広げるかについて、関西 NGO 協議会の理事会でも打ち合わせを行い、次回会合のときには関西 NGO 協議会案を提示していきたいので、JICAでも案を作成してほしい。

(4) NGO-JICA 相互研修（関西版）についての第4回打ち合わせ

日 時 2006年8月16日 16時～18時
会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース
参加者 関西 NGO 協議会 藤野代表理事、榛木事務局長
JICA 大阪 鍋田チーム長、伊藤調整員
JICA 兵庫 高田職員、大井調整員

<議事>

1 藤野理事長コメント

- (1) 「よりよい国際協力はどうか」というテーマで話をすることは賛成。これまで NGO-JICA 協議会でも東京で実施している NGO-JICA 相互研修でも、ここまで本質的なテーマを話し合うことはなかったこともあり、このようなテーマで話し合うことは重要である。話し合うテーマについては、NGO-JICA 双方で絞り込んでいけばよいと考える。
- (2) 年度当初に本件は予定されていなかったため、関西 NGO 協議会サイドがロジ部分の対応をするのは困難。ただし、周知、参加勧奨、当日のファシリテーターの手配などの連携は可能なので、その点は協力をしていきたい。
- (3) 大学生のオブザーバー参加は時期尚早であるので、今回は認めないことを提案する。
- (4) 参加者にかかる経費について、基本は食事代のみを参加者負担とする方向で考えてよいか確認したい。

2 JICA コメント

- (1) JICA としても、「よりよい国際協力はどうか」というテーマで研修を開催することに賛成。ただし、このような議題で意見交換を行うと散漫になっていく可能性もあるので、ファシリテーターの人選はしっかりと行う必要がある。
- (2) これまでの打ち合わせと本日の話し合いを受けて、大枠は次のように考えている。
 - ①研修は11月25日13時頃開始、26日12時解散で実施する。参加人数は NGO15人、JICA15人を想定。
 - ②JICA 兵庫が案内文案を作成し、9月上旬には案内開始（各団体から周知、呼びかけを行う。）
 - ③10月中旬頃に打ち合わせを実施。研修で意見交換するテーマを持ち寄り、選定する。
 - ④11月上旬に意見交換するテーマを参加者に周知する。
 - ⑤JICA 兵庫の手配により実施。ただし、当日は JICA 兵庫が満室であるため、会場選定は別途検討する。
 - ⑥交通費（下限を設定することも検討）、講師謝金、宿泊費は JICA 負担。食費は参加者負担。

(5) NGO-JICA 相互研修（関西版）についての第5回打ち合わせ

日 時 2006年10月16日16時～18時
会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース
参加者 ファシリテーター 中田豊一代表
関西 NGO 協議会 藤野代表理事、榛木事務局長
JICA 大阪 鍋田チーム長、伊藤調整員
JICA 兵庫 高田職員、大井調整員

<議事>

1 研修概要

- (1) NGO と JICA は、協議会やプログラムでの連携はしているが、双方に対する本質的な問題意識の共有（例えば、案件の優先順位、主体者や受益者の定義、なかなか JICA スタッフが現場に行けない、NGO は経験が少ないなど）の話を公式の場でする機会がないので、今回をそうした話ができる研修としたい。
- (2) NGO-JICA 協議会では、来年度予算や JICA の方針などの大きな規模の話になるし、連携協議会では、報告書の提出頻度や研修の要望といった細かすぎるテーマが取り上げられてしまうので、本質的な議論をする場として今回の研修を活用したい。
- (3) 来年度もやることありきではなく、今回の研修の結果を踏まえて来年度以降どうするかを検討していくことが重要と考えている。

2 研修の形態

- (1) 1泊2日で真剣に議論するのであれば、初日は19時まで連続した議論を行い、食事を挟んで話をした方が活発な議論が期待できる。また、翌日は昼食時に外に出てリフレッシュすることで、午後の振り返りがより充実したものになると思われる。全体の流れについては、適宜ファシリテーターが調整する。
- (2) 最初のアイスブレイクとして、11月1日～10日までの連続する3日間の生活について事前に記載した内容を活用したい。そうすることで、NGO も JICA も参加者の日常について理解を深めることが期待できる。

3 参加者

- (1) 先着順にするのではなく、申込み状況に応じて事務局が選定する形式とした方がよい。
- (2) 人数は30人が最大規模である。少ない方がマネジメントしやすいので、それ以下でも構わない。

(6) NGO-JICA 相互研修（関西版）の振り返り

日 時 2006 年 12 月 22 日 10 時～12 時

会 場 関西 NGO 協議会内打ち合わせスペース

参加者 関西 NGO 協議会 藤野代表理事、宮下職員

JICA 大阪 鍋田チーム長、伊藤調整員

JICA 兵庫 高田職員、大井調整員

<議事>

1 研修の成果

- (1) アンケート結果からみても、成功した企画だと思われる。また、事前会合や当日準備も手間を省いて実施できた点でも効率的に開催できたと思われる。
- (2) ただ、連携するために本質論を議論したのではなく、「よりよい日本の国際協力をどうするか」という観点から話し合うべきだったが、それが必ずしもできたとはいえないと感じている。今後の課題だろう。JICA や NGO の公式見解を確認する会議ではないので、参加者が組織を離れて本音で意見交換することが重要と考える。テーマも「先進国が国際協力をとおしてもたらした負の遺産」とか「開発コンサルタントの評価」というようなところまで踏み込むことで、「よりよい日本の国際協力のあり方」について建設的な考えを共有できるものと思われる。

2 今後の研修のあり方について

- (1) 来年度も何らかの形で開催できることが望ましいが、その場合でも今年度のメンバーがそのまま全員参加するのではなく、実行委員会を公募して行うのが望ましい。中田さんには相談役として加わっていただくことも重要。また、今年度の参加者の中から実行委員会になる人がでてくることが望ましいので、公募の際に参加勧奨することも検討すべき。
- (2) プログラム内容は、今年度と同様のものを実施するのか、あるいはアドバンス編を実施するか、来年度の事務局で決定していけばよい。ただ、アドバンス編は研修として行うよりは、2ヶ月に1回定期的に協議をするという程度でもよいかも知れない。

3 来年度の予定（案）

- (1) 4月～5月頃に、2007年度に実施するか、実施するとしたら「いつ」「どこで」「どのテーマで」やるかを決めていく。ただし、参加者層のニーズが明確につかめないときは、開催を延期するぐらい柔軟な運営体制とすることが望ましい。参加者には、自治体職員や NGO 専従職員ではないが NGO に関わっていこうとする社会人など加えることも合わせて検討する。
- (2) JICA 兵庫、JICA 大阪、関西 NGO 協議会から情報発信をし、実行委員を公募していく。事務局は JICA 側が実施することが効率的と思われる。

以上

とととん語るう。 たがいの疑問を

NGO-JICA相互研修2006（関西）

日本のよいよい国際協力はどうあるべきか

～NGOとJICAのスタッフの対話～

（ファシリテーター 中田豊一さん）

2006年11月25日（土）～26日（日）

1. 研修の概要

この研修は、NGOとJICAのスタッフの双方が、相手方に対して「自分たちからみたらここが理解できない。」というもののうち本質的な部分を真っ向勝負で話し合おうというものです。その意味では、どちらかが一方的に教える研修でも、例えば開発学の概念を学ぶような類の研修でもありません。

お互いの立場を理解しつつ、一歩踏み込んで建設的に対話をすることで、次の3つの成果が期待されると私たちは考えています。

- (1) つながる「線」
NGOとJICAのスタッフ同士が本質的なつながりを構築することを目指します。その前提となる自由な意見交換から、お互いの制約と連携の可能性を見つけます。
- (2) ひろがる「面」
個人間のつながりから発展し、組織間同士のつながり、組織横断的なつながりをつくります。
- (3) 高めあう「質」
構築されたネットワークをとおして、 $1+1=2$ にとどまらず3以上となるような相乗効果が発揮される「日本のよいよい国際協力」の実現を目指します。

2. 研修詳細

- (1) 研修日時 2006年11月25日（土）13時00分～26日（日）14時30分
- (2) 研修宿泊場所 JICA大阪（大阪府茨木市西豊川町25-1）（全員宿泊）
- (3) 研修参加費 交通費と宿泊費（朝食込）は、規程によりJICAが負担します。参加者の負担は、食費（昼夕食）と会議中の飲み物代です。
- (4) ファシリテーター 中田豊一さん
（講師紹介） （特活）シャプラニール=市民による海外協力の会バン格拉デシュ駐在、（社）セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンなどを通して国際協力の分野で活躍。また、阪神大震災地元NGO救援連絡会議に参加の後、（特活）市民活動センター神戸理事長として、地域の市民活動ネットワークにも関る。2004年2月からラオスでJICA専門家として活動し、本年帰国。現在、神戸在住。1956年生れ。愛媛県出身。

会場へのアクセスについては、以下のホームページにてご確認ください。

<http://www.jica.go.jp/branch/osic/japanese/whats/index.html#map>

3. 日程（詳細は変更になる場合があります。）

11月25日（土）

13:00	集合
13:30-14:00	開講式・事務連絡
14:00-16:30	全体ワーク 「NGO・JICA 連携」の課題と可能性
17:00-19:00	グループワーク1 「それぞれの立場・限界の共有」～全体ワークを踏まえて
19:30-21:30	夕食・懇談会（会費制 2,000円/人）

11月26日（日）

09:00-10:00	グループワーク2（グループワーク1の続き） 「グループワーク1の発表準備」～全体ワークを踏まえて
10:00-11:30	グループワークの内容共有 意見交換をとおした気づきの共有、他グループとの意見の共有
11:30-13:30	昼食（JICA 大阪の外で昼食をとります。）
14:00-14:30	振り返り アンケート記入・解散

4. 募集人数

NGO スタッフ 15名、JICA スタッフ 15名 合計 30名

★定員を超えた場合、選考の上受講者を決定しますので、ご了承ください。参加の可否については、11月22日（水）までに、FAXまたはメールにて事務局から連絡します。連絡がない場合は、下記連絡先にお問い合わせください。

5. 参加者資格要件

- (1) 日本に事務局を置く開発援助に携わる NGO または JICA のスタッフ（書面での提出は求めませんが、所属先の了解がなされていることを前提とします。）
 - (2) 研修の全日程への参加が可能な方
- ※ 過去に NGO-JICA 相互研修に参加した経験のある方も歓迎します。

6. 服装・持参するもの

- (1) リラックスできる服装でご参加ください。
- (2) ワークに必要なもの（筆記用具、ノート等）、宿泊に必要なもの（着替え、洗面用具等）は各自ご持参ください。

7. 参加申し込み方法

別添の受講申請書とアンケートを、担当あて FAX または郵送もしくはメールで申し込んでください。

8. 申し込み締切日

2006年11月17日（金）（郵送の場合は消印有効）

NGO-JICA相互研修

お申し込み・お問い合わせ先：

JICA 兵庫業務チーム NGO-JICA 相互研修担当（高田、大井）
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
TEL: (078) 261-0341 FAX: (078) 261-0342
E-Mail: jicahic-event@iica.go.jp

秘

日本のよりよい国際協力はどうあるべきか

(1/2)

2006年11月25日(土)～26日(日) JICA 大阪開催

受講申請書

2006年 月 日作成

ふりがな			男 女	ローマ字氏名	
氏名				(姓)	(名)
生年月日	西暦	年	月	日	(歳)
現住所	〒 TEL () - FAX () - 自宅最寄駅 線 駅				
E-Mail					
所属団体の概要	名称				スタッフ数 人
	所属部署				(常勤 ・ 非常勤)
	所在地	〒 TEL () - FAX () -			
	団体HP	http://			
交通費・宿泊費 振込先口座	銀行名				
	支店名				
	種別	普通 ・ 当座			
	口座名義人(フリガナ)				
	口座番号				

本プログラム申込書にご記入いただく個人情報は、希望者あてのJICAからの資料送付等の情報提供を除き、以下の目的にのみ使用します。希望者は、研修当日に確認します。

・本プログラムに関連する事前・事後の諸手続き

事業実績取りまとめ等の統計データの作成は、個人が特定できない形式で行います。

応募書類は返却しませんので、必要な方は予めコピーをお取りください。

11月22日(水)までに受講にかかる連絡がない場合は、お手数ですが、JICA兵庫までお問い合わせください。

事前アンケート

所属団体名： _____ 氏 名： _____

(注) 本アンケートは研修中に配布する予定ですので、予めご了解のうえ、ご記入ください。

1.	所属団体の活動概要と現在担当している業務									
2.	連携の経験の有無 〈NGOの参加者〉 JICAと連携したこと 有（団体として連携or個人で連携） 無 〈JICAの参加者〉 NGOと連携したこと 有（JICA業務で連携or個人で連携） 無 ★連携の経験のある方は、具体的な内容をご記入ください。									
3.	アイスブレイキングに活用しますので、11月1日～10日のうち、連続する3日間に、どのような24時間を過ごしたか、24時制でご記入ください。（ただし、プライベートに該当する項目は記入する必要はありません。終日ワークショップに参加というような非日常的な日程ではなく、日常的な3日間についてご記入ください。）									
例	07時	09時	9-11	12-13	13-14	15-17	18-21	21-22	01時	
	起床	出勤	所内会議	ランチ	来訪者対応	データ入力	(私用)	講演準備	就寝	
初										
日										
二										
日										
目										
三										
日										
目										
4.	自分の連続する3日間を振り返ってみて、感じたことをご記入ください。									

NGO-JICA 相互研修(2006年11月25-26日) 終了時アンケート

2日間の研修お疲れさまでした。本研修について以下のアンケートにご協力下さい。

1 今回の実体験プログラム全体についてお答え下さい。一つ選んで○をつけてください。

(1) 今日のプログラムはどこで知りましたか。

- 職場で案内があった JICA の HP 関西 NGO 協議会の HP
- 知人からの紹介 (知人の名前または団体名))
- その他 ()

(2) 日程はどうでしたか

- 長かった ちょうど良かった 短かった

(3) 次回もこのようなプログラムがあれば

- 是非参加したい 参加すると思う どちらとも言えない 参加しない

2 11月25日のプログラムについて (いずれかに○をつけてください)

- 非常に良かった 良かった 余り良くなかった 良くなかった

感想・コメントなど

3 11月26日のプログラムについて (いずれかに○をつけてください)

- 非常に良かった 良かった 余り良くなかった 良くなかった

感想・コメントなど

(裏に続きます)

4 この研修で、ご自分の活動・仕事に役立てられる収穫は何でしたか。

5 この研修をとおして「新たな発見事項」、「再確認したこと」を何でしたか。

6 この研修の改善点は何だと考えますか。

7 ご意見、ご要望、ご感想など、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。